

森田欣也の滑稽俳句（二）

小西昭夫

おそらく、森田欣也さんは自らの口惜しさや情けなさを詠んだ句が、読者からは滑稽な句として読まれることによって、意識的に滑稽句を書くようになったのだと思われる。笑いによって自分を他者に開こうとしたのだ。だから、森田さんの俳句は風通しがいい。

森田さんの俳句の可笑しさは、相対的な視点の面白さにあるものが多い。

俳句より短き夜となりにけり
スピーチは夏の夜より短めに
春にまだ脚の長さが足りなくて

一句目と二句目は似ているが、短夜と俳句、スピーチと短夜というように、時間とそれとは違うものの長短を比較することで笑いを生みだしている。三句目はまだ春が来ていないことを詠んだものだが、「日脚伸ぶ」という季語を使わずして冬を詠んだ可笑しさがある。大小や狭広、厚薄、硬軟の比較を楽しんでいる俳句も多い。

日焼けした男小さきパンツはく
お尻より大きな林檎買いにけり
お値段の割にちっちゃきビキニかな
皮下脂肪かなり厚めの雪女